共同研究報告

「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究と WEB 公開、教育実践への応用」

柴 田 雅 生（人文学部日本文化学科）
山 本 陽 子（人文学部全学共通教育）
勝 又 基（人文学部日本文化学科）
矢 吹 道 郎（情報学部情報学科）

4 『絵本・絵巻の世界』の WEB 公開について

矢 吹 道 郎

1 本研究の背景について

明星大学図書館所蔵の貴重書の WEB 公開は、2002 年より世界的に見ても高い価値を持つシェイクスピアのフォリオの初版本〜第 4 版、及び、同時代のベンジョンソンの戯曲集を『Shakespeare Collection Database』として、

http://shakes.meisei-u.ac.jp/

に公開したのに始まり、『奈良絵本・絵巻の世界〜武士の物語絵巻をよむ〜』

http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/

米国の鳥類学者 John James Audubon による米国鳥類図鑑『Birds Of America』

http://BirdsOfAmerica.meisei-u.ac.jp/

と続いてきている。

これは、文化的に価値ある貴重書を、劣化防止及び保安の観点の問題を気にせず、より多くの利用者に利用して貰い、大学として文化的な貢献を行っていくことを目的としている。

本研究は新たに本学所蔵の「徒然草」「一目玉鉾」の研究成果と貴重書そのものを広く一般に公開することを目的として始まった。

2 貴重書公開 WEB の意味と目的

Web における公開には、当然ながらディジタル画像が必要となる。現状のインターネットと Web では、回線速度の限界から、高解像度のディジタル画像は望まれない。しかし、高解像度の画像を作成し、経年変化、劣化が進むであろう貴重書のディジタル保存を行うことにも大きな意味がある。当然ながら、Shakespeare Collection Database においても、高解像度のディジタル画像を作成し、未来への遺産とすべく保存を行っている。

前研究の成果である『奈良絵本・絵巻の世界〜武士の物語絵巻をよむ〜』の Web 公開も

またいくつかの意味を持っている。すなわち、

1. 学術的
   - ・研究成果の発表
   - ・研究等における貴重書の活用
2. 文化的
   - ・貴重書のディジタル保存
   - ・多くの人に楽しんで貰う

の意味がある。

もしも単なる「貴重書図書館」であり、研究成果発表であるならば、画像とともに研究成果を Web 化し公開されていれば良い。しかしながら、研究目的での活用を目的とするならば、「どのような機能を持つべきか」を考慮する必要がある。さらに、一般の利用者をも目的とするのであれば、使いやすく、かつ、楽しんで閲覧できるものでなければならない。

貴重書のディジタル保存については、本研究においてはさらに重要である。一般にこれらの古書である絵本絵巻等は、「広げる」と言う作業が、「傷める」につながり、さらに紫外線による色の劣化もあり、美術館等で一般に実物が公開される場合でも、ごく限られた一部が公開されるにすぎず、全体を見渡したり、全体を「読む」ということは、困難である。たとえ研究者であっても細心の注意が必要となる。本研究のための写真撮影も、専門家による細心の注意のもとに行われた。

過去においては、この問題を解決するために、復刻本、あるいはコピー本の作成が行われる場合があったが、たとえ作成されても非常に高価なものとなり、一般の利用者が楽しむものとはならない。

3　絵本絵巻の公開

本研究は、2008 年 11 月 19 日より、URL

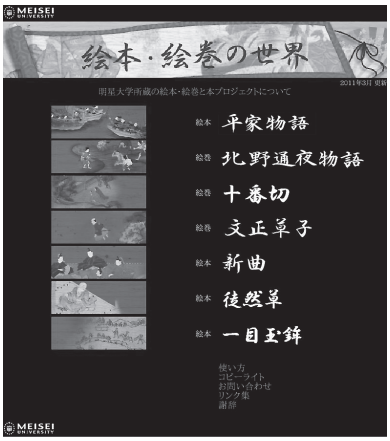
http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/

に於いて公開されている『奈良絵本・絵巻の世界〜武士の物語絵巻をよむ〜』に「徒然草」「一目玉鉾」のデータを追加することで実現することとした。この理由は、

- ・既に URL が知られており、新たな URL を周知する必要がないこと。
- ・奈良絵本の「奈良」の意味が曖昧であり、将来を見据えてその単語（nara）を URL には含めていないこと。
- ・「徒然草」「一目玉鉾」を含める事で全体としての統一性が崩される事がないこと。
- ・「奈良」の文字を取り払う事以外、大きなデザイン上の変更を必要としないこと。

が挙げられる。

結果として、トップページのタイトルを『奈良絵本・絵巻の世界〜武士の物語絵巻をよむ〜』から、『絵本・絵巻の世界』に変更し（全体として武士とは関係なくなるため、サブタイトルの「〜武士の物語絵巻をよむ〜」は削除した）、「徒然草」「一目玉鉾」のデータを追加し、トップページに追加された絵本へのアイコンを追加することとした。



4　画像データ

保存されている Web 上の画像データの情報は『奈良絵本・絵巻』の世界と変わりはなく、JPEG 形式で保存されているおり、サイズは、Thumbnail, Small, Medium, Large の 4 種類が用意されている。新たに追加された、公開画像 4 種類とディジタル保存のための画像（TIFF 形式、非公開）の個別のおよそのデータ量を表 1 に示す。以前のデータより画像がシンプルなため、多少小さくなっているが、大きな違いはない。

表 1　個別の画像データのデータ量

Thumbnail	約 33 KB
Small	40 KB〜50 KB
Medium	80 KB〜140 KB
Large	200 KB〜300 KB
保存画像	およそ 67 MB

「徒然草」「一目玉鉾」のデータを追加した結果、本ホームページ全体ではおよそ 1.2 GB の情報量となっており、Web 公開をしていないディジタル保存のための高解像度画像を含めると、全体で 11 GB ほどになる。

5　WEB ページの概要

現状（2011 年 1 月現在）は、正式公開の前の実験サイトの状態であり、構築確認のために

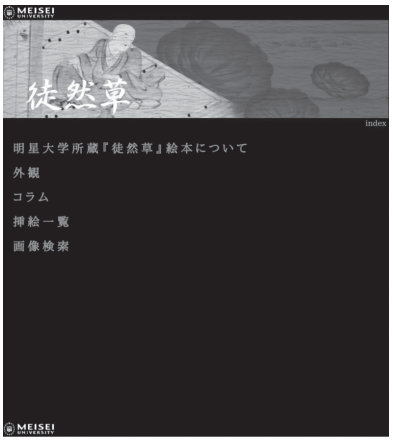
http://160.194.128.40/

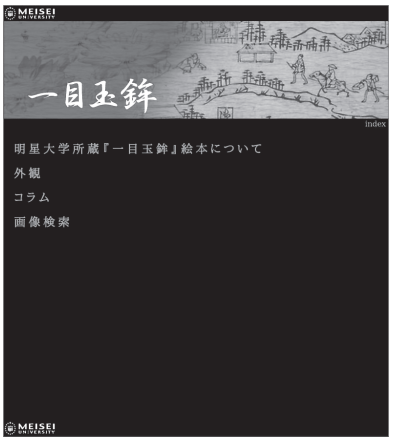
に於いて閲覧可能である。

実験サイトのトップページは、『図版 4-1：「絵本・絵巻の世界」トップページ』となっている。トップページからは、各絵本、絵巻のページへと進んで行くことが可能である。

現在のところ、

・平家物語（絵本）
・北野通夜物語（絵巻）
・十番切（絵巻）
・文正草子（絵巻）
・新曲（絵本）
・徒然草（絵本）





・一目玉鉾（絵本）

の 7 つの絵本、絵巻が閲覧可能となっている。

今回の研究の成果の「徒然草」と「一目玉鉾」のトップページは、それぞれ、『図版 4-2：「徒然草」トップページ』と『図版 4-3：「一目玉鉾」トップページ』となっている。

6　機能

現状では、新たに加えられた「徒然草」「一目玉鉾」についての機能は、

・画像の一覧
・個別頁の閲覧
・画像サイズの選択
・頁の移動（ページをめくる機能）

であり、その他の機能はまだ備えられていない。

今後、既存の絵本、絵巻のホームページに実装されているものと同様に、文章の頁については翻刻を、絵の頁については解説を閲覧できるようにする予定である。「徒然草」「一目玉鉾」についての機能は 2011 年 3 月までに完成させる予定である。

7　アクセス統計

2008 年 11 月からの『奈良絵本・絵巻の世界』の URL である

http://ehon-emaki.meisei-u.ac.jp/

に対するアクセス統計を表 2 に示す。（Web のサーバのログ解析プログラム Analog によるページ要求の集計結果である。2008 年と 2011 年は計測期間が短いため、当然ながら、アクセス数は少ない。）

表 2　アクセス統計

年	アクセス数
2008 年	44301
2009 年	217241
2010 年	310620
2011 年	17085

個別のアクセスでは「平家物語」のアクセスが一番多く、「十番切」「文正草子」「北野通夜物語」「新曲」と続いている。今後「徒然草」「一目玉鉾」が加わることにより、全体としての完成度が高まり、さらなるアクセスが期待される。

8 まとめ

本ホームページは、合計７つの絵本・絵巻を部分的ではなく、すべてを閲覧できるホームページとなった。

現状で、本ホームページは貴重書を公開するという文化的な意味を持ち、研究成果の公表であり、さらなる研究のための利用も可能であり、さらに、一般の利用者が楽しめる価値あるホームページとなっていると考えている。

今回の２点の作品の機能が完成すれば、『絵本・絵巻の世界』としてのホームページは完成となる。正式公開は 2011 年４月あるいは５月を予定している。

3　明星大学蔵『一目玉鉾』WEB 公開に伴う解説・コラムについて

勝又　基

1　はじめに

明星大学ホームページ「絵本・絵巻の世界」は、すでに『平家物語』『北野通夜物語』『十番切』『文正草子』『新曲』の５作が公開されている。それに続いて今年度『徒然草』『一目玉鉾』の２作が公開され、『一目玉鉾』の解題・コラムを担当することになった。

ページ全体の統一を図るため、作成にあたっては基本的に先行公開作の形式・方針を踏襲した。具体的な内容については下記の通りである。

2　解　　題

【作品】【作者】【書誌】の３項に分けて述べた。

このうち【作品】【作者】は簡略を旨とし、通説を中心にまとめた。いっぽう【書誌】は、明星大学所蔵本についての個別的事柄を中心にまとめた。

以下に【書誌】の節のみ転載しておく。

> 明星大学蔵本の書誌事項について簡単に述べておく。
>
> 四巻四冊。縦 26.0 ㎝×横 18.2 ㎝。刊記は「元禄弐年己年正月吉日／大坂高麗橋心斎橋筋南入町／雁金屋庄左衛門板」。他所蔵機関の本には書肆（＝本屋）名を削除したもの、享保三年（1718）の刊記を持つものなどが存するが、明星大学本は元々の刊記を持つ初印本に近い一本と言って良い。
>
> 表紙は最初からついていたもの（原装）だが、題簽（題名などを表紙に貼り付ける紙片）は、カラーコピーか何かで後から補われたものである。
>
> 『一目玉鉾』の早く刷られた本には、巻四に丁付（頁番号のようなもの）に乱れがある。具体的に言えば、「赤坂」ではじまって「鷺乃松」で終わる丁と、「志賀の嶋」ではじまり「三池」で終わる丁との両方に、丁付が「十六丁」と記されているのである。
>
> 上段の文章や下段の地図のつながりで考えれば、十四丁、十六丁（「赤坂」で始まる）、十五丁、十六丁（「志賀の嶋」ではじまる）、十七丁、とするのが正しい。明星大学本はその通りの配列となっている。諸本によっては並び順の異なるものも存するが、いずれが早く印刷されたかは明らかでない。
>
> 印刷状態、保存状態は悪くない。朱による書入れが若干ある。

3　コ ラ ム

本研究プロジェクトは絵本・絵巻についてのものであり、先んじて公開されている資料に付されたコラムも挿絵に関する言及がほとんどである。よってこの『一目玉鉾』に関するコラムの対象も、挿絵を中心とした。

執筆に際しては、ホームページに掲載するコラムであるという性質を考慮した。すなわち学問上の発見よりも、わかりやすさを重視しての執筆を心がけた。『一目玉鉾』は道中記的な地誌であるため、描かれた絵に特色を見出しにくい点もあった。よって中には挿絵から離れたコラムもある。

コラムは計６作書いた。『一目玉鉾』は全４巻であるが、その各巻に一つはコラムを作成することとした。

このような方針のもとに成ったコラムは下記の通りである。

【1】平安の昔をしのぶ――宮城野（巻一・十丁ウ）

『一目玉鉾』には人物が数多く描き込まれている。旅人や侍、漁師などさまざまであるが、基本的には江戸時代の人物が描かれているようである。そんな中、この「宮城野」の箇所だけはやや事情が異なるようだ。草深い野原に、烏帽子に水干の貴族が描かれ、傍らには長い箱状のものが二つ置かれている。上段の説明を読むと次のように記されている。

> 此野の糸萩、花房も余の所にかはりて、むかしは爰に錦を乱し、都人の目にもめづらしく、為仲手折せて長櫃に入てかへられし。其跡もかたちも、今は一本も見へず。広野に小松ばかりありて、秋をしらず。此花の種元は枯て世に残り、仙台の人の庭に咲せし。

昔この地は萩が咲き乱れていた。その様子が都人には珍しく見え、為仲という人が手折って長櫃に入れて持ち帰った、と書かれている。『定本西鶴全集』の注にもあるように、源為仲は平安末期の歌人で、逸話は『無名抄』下巻にあるもの。陸奥の守の任を終えて都に帰る際、この萩をめでて長櫃十二棹（！）に入れて持ち帰ったというのである。

続けて『一目玉鉾』は、宮城野は今その跡形もなく、野には小松ばかりが生えているとしている。この箇所に限っては江戸時代の様子ではなく、平安時代の昔をしのんだ挿

絵が描き込まれているのであった。

【2】空海と蛇骨堂 ── 日和田（巻一・十七丁表）

挿絵を見ると、「日和田」のすぐ脇に「ほねくはんをん（骨観音）」と記され、お堂らしき絵が描かれている。その説明はこうだ。

むかし爰に永代淵とて、青竜（せいりう）の住て、人をなやましける。弘法大師（こうほうしいまし）戒め給ひ、其蛇骨（じやこつ）にて観音を作り給ふ。

永代淵なる所に龍が住んでいて人々を苦しめていた。それを弘法大師すなわち空海がこらしめ、その骨で観音像を作った、というのである。

蛇骨堂は今も存するが、今に伝えられる伝説は、空海のものではない。簡単に言えば蛇に変じた松浦佐世姫の骨で彫刻した、というものである。この佐世姫伝説は少なくとも江戸時代中期には存したらしく、たとえば天明七年（1787）にこの地を訪れた古川古松軒（ふるかわこしようけん）は、住職から松浦佐世姫の伝説を聞いたと書き留めている。

知る限りでは、蛇骨堂を空海と関わらせてを記すものは『一目玉鉾』のみである。西鶴当時には本当に空海伝説と関わっていた時期があったのだろうか、それとも西鶴の創作なのだろうか。西鶴の旅行と説話収集との実態は、まだ明らかでない点が多いのである。

【3】描かれた女性 ── よしわら（巻二・十三丁裏）

『一目玉鉾』は上段に文章、下段に道中地図という構成をもつが、両者をつきあわせてみると,必ずしも対応していない事に気づく。そのうちの一つが巻二、「よしわら」である。上段には説明が全くないが、下段には挿絵がある。見ると女性が描かれているようだ。『一目玉鉾』の中には人物が多く描かれているが、そのほとんどが男性である。このように女性が描かれている箇所は珍しい。

吉原は、江戸から東海道を歩いて原と蒲原との間に位置する宿駅である。富士山の眺望がよく知られている。挿絵で暖簾を垂らした家は旅籠だろう。となれば、前に立って旅人と語るがごとき女性は客引きの留め女を描いたものと考えて間違いない。留め女は飯盛女、出女とも言い、遊女のような役割も果たした。

旅人が宿場で遊女に癒されるのは当時の旅の常。よって、このような場面はどの宿場でも見られたはずである。たとえば同じ東海道を描く浅井了意『東海道名所記』(万治年間〈1658〜60〉刊)では、品川、水口、大津などでこうした挿絵が描かれている。

『一目玉鉾』で、ことさら吉原宿にこの図柄が描かれているのは、まさか「よしわら」という名前の縁で遊女を描いたダジャレという訳ではないだろう。ただ、宿場を絵で表すには、これ以上ない有効な図柄だという事は言える。先にも述べた通り「よしわら」には文章の説明が無いけれども、ここが宿場だという事は留め女の絵だけですぐに分かるのである。

【4】欠かせない名所和歌 ── 佐夜の中山(巻三・二丁表)

佐夜の中山(小夜の中山、佐世の中山とも)は、東海道を江戸から行って金谷と日坂(につさか)との間にある峠で、難所かつ名所の一つである。この地を詠んだ西行の和歌、

年たけてまた越ゆべきと思ひきや命なりけり佐夜の中山

は、東海道の名所を詠んだ和歌の中でも、最も著名なものの一つであろう。

しかし『一目玉鉾』は、巻三に「佐夜中山」の項を設けているにもかかわらず、この和歌を掲載しない。その全文を引用してみる。

〇佐夜中山

待明すさよの中山中〳〵に一声つらき時鳥かな

旅衣夕霜さむき篠のはのさやの中山嵐吹也

鳥のねを麓の里に聞捨て夜深く越る佐夜の中山

古代には此峰に関の戸ありし

佐夜の中山に関する和歌を三つも掲載しておきながら、「命なりけり」の和歌を掲載しないというのは不思議である。『定本西鶴全集』の注釈によれば、『一目玉鉾』が引用した三つの和歌は、すべて『新後撰和歌集』から採ったものであるという。

俳諧師であった西鶴であれば諳んじていてもおかしくない「命なりけり」の和歌を用いず、『新後撰和歌集』から三つも和歌を採用するとは、どのような意識なのだろうか。

『一目玉鉾』には地名にちなんだ和歌が数多く引用されている。しかし著名な和歌が掲載されず、あまり知られていない和歌が見えることが、ままある。また出典の明らかでない和歌もまだ多く残されており、解明が待たれている。

【5】ランドマークを描く ── 淀の城（巻三・二十二丁裏）

『一目玉鉾』には数多くのお城が描かれている。これらがその構造を正確に表しているのか、城郭に詳しくない筆者には良く分からない。

だが、巻三の「淀の城」だけは筆者にも一目で「あ、淀城だ！」と分かる。その理由は水車が大きく描かれているからである。

淀城は松平定綱が元和九年（1623）～寛永二年（1625）にかけて建てた平城である。そのシンボルともなっているのが宇治川に接した北面に水車で、多くの和歌や絵画に描かれた。西鶴も『武家義理物語』巻三の一に「やう〳〵淀の小橋（こばし）を過ぎ、水車の夕浪おもしろく」と記している。

全国の地理を描く『一目玉鉾』であるが、作者西鶴も大坂出身なら出版も大坂。読者も京阪が中心であった事は容易に想像がつく。遠い地の城はともかく、大坂のランドマークとも言える淀城の水車は、さすがに正確に描く必要があったろう。

【6】タコの名産地――明石（巻四・五丁表）

明石ダコと言えばマダコの代表格である。明石周辺の魚文化を記した好著・鷲尾圭司『明石海峡魚景色』（1989 年 8 月　長征社）もその巻頭に「明石ダコ」を置き、マダコの中でも「速い潮流と豊富なエサで、ボディービル選手のようにがっしりと育つ明石ダコは、名実ともに日本一と評価されます」と記している。

しかし『一目玉鉾』の記述は異なる。巻四の「明石城主」の項には次のように記されている。「大坂より是まで十五里の所なり。此浦の名物、飯蛸、縮布」。つまり記されているのはマダコでなくイイダコなのである。イイダコはマダコに比べて小型で足を含めても 20 センチほど。卵が飯粒のような形をしているのでそう呼ばれる。マダコとは別種であって混同とは考えがたい。

『一目玉鉾』はおそらく、播州高砂のイイダコの事を書いているのだろう。江戸時代におけるその評価の高さは注目すべきである。松江重頼『毛吹草』（明暦元年〈1655〉刊）巻四は地域ごとの名産を挙げているが、その「幡摩（ママ）」の箇所に載るタコは「高砂飯蛸（タカサゴノイヒダコ）」「二見蛛蛸（フタミノクモダコ）」の二つだけである。また時代は下るが『和漢三才図会』（正徳三年〈1713〉刊）には、播州高砂の産は、頭の飯多し。摂、泉の産は、飯なきものもまた半ばす」と高砂の飯蛸を評価している。

現代の播磨のイイダコは、と、先の『明石海峡魚景色』を見てみると、冬の章の巻頭にイイダコがいた。「播磨の冬の味を演出」とある。捕り方は、「いまでも、巻貝のニシの殻やダボ貝と呼ばれるウチムラサキ貝の殻を縄に連ねて仕掛け、玉子を海にくるイイダコを捕らえます」とある。いまは明石のマダコを押しのける程ではないにせよ、なおも播州の味であるようだ。

以上